氏　　名	単　荷君
学位(専攻分野)	博士(学術)
学 位 記 番 号	総研大甲第 2259 号
学位授与の日付	2021年9月 28日
学位授与の要件	文化科学研究科　国際日本研究専攻 学位規則第6条第1項該当
学 位 論 文 題 目	近代青島の都市空間の変容－日本的要素の連続と断絶を中心に－
論 文 審 査 委 員	主　査　　松田　利彦 国際日本研究専攻　教授 伊東　貴之 国際日本研究専攻　教授 劉　建輝 国際日本研究専攻　教授 塚瀬　進 長野大学　環境ツーリズム学部　教授 松重　充浩 日本大学　文理学部　史学科　教授

（様式３）

博士論文の要旨

氏　　名　単　荷君

論文題目　近代青島の都市空間の変容－日本的要素の連続と断絶を中心に－

本論文はドイツの膠州湾租借期（1898～1914 年）、第一次日本占領期（1914～1922 年）、中華民国統治期（1922～1937 年）という時間軸に沿って、異なる政治権力の支配に置かれた青島の空間的変容及びそこに見られる日本的要素に注目し、日本が関与した青島の都市発展の過程を政策面、社会面から多角的に解明しようとするものである。具体的には統治者の更迭にともなう社会構造・統治政策・都市計画の転換がいかに都市の商工、居住、生活空間の変容に反映されていたかを考察し、青島の都市形成の過程における従来の研究では看過されてきた日本的要素の断絶とその連続性を検討した。

第１章では、ドイツ帝国の海外拡張の過程における膠州湾租借地の軍事、商業、文化の拠点としての位置づけを論じた上で、土地制度、都市計画、建築規則等を具体的に分析することによって、ドイツ膠州湾総督府の施した「模範的」都市開発の実態を考察した。また、ドイツ膠州湾総督府の積極的な中国人招来策による中国人勢力の台頭と華洋隔離の居住空間の解体を分析することで、その「模範的」植民地の二面性を検討した。さらに、当時の住所録に基づき、重要な商業的施設と近代的工業施設を整理することによって、青島における近代的な商業空間及び近代工業の成立を考察した。

第２章では、まず日清戦争以降、日本政府並びに日本の民間組織によって行われた青島に対する持続的かつ幅広い調査活動を考察した。当初青島を占領する価値はないと極めて低く評価していたが、ドイツの膠州湾経営と青島－日本間の日増しに緊密になっていく経済的な繋がりによって、軍港、貿易港としての価値が改めて認識されるようになったことを明らかにした。また、ドイツ租借期における日本勢力の青島進出に焦点を当て、日本人の在留人数、職業、出身地、活動区域等の分析を通じてこの時期の日本人社会の全体像を明らかにした。さらに、日本人の中小商人の経済活動、情報収集活動等を考察することによって、ドイツ人や中国人との間で競争と連携を繰り返しながら経済活動を展開し、仕事上の人脈等を通じて情報収集活動に携わり、日本帝国の進出を陰で支えていた日本人社会の具体像を提示した。

第３章では、まず、日本当局の青島施政方針を明らかにしたうえで、青島現地の最高指導機関である青島軍政署が、自らの統治基盤の確立と山東省内陸部における日本の影響力の拡大のために、中国側の有力な政治勢力に対して行った各種の政治工作を明らかにした。また、日本占領後の土地政策及び土地の利用状況をドイツ租借期と比較することにより、青島軍政署がドイツ総督府の統治策をいかに継承または調整していたかを考察した。具体的には、ドイツ膠州湾総督府の独創的な政策として高く評価された土地増価税が廃止され

たことや、土地の払下げの代わりに土地の貸下げが採用されたことなどを明らかにした。さらに、日本占領後における青島の現地社会構造の変容を考察し、支配者としてのドイツ人と被支配者であった日本人との地位逆転の過程も明らかにした。その上で、日本人の急激な増加がもたらした家屋の払底や芸妓、酌婦の散在による風紀紊乱といった青島における都市改造の方向性を規定する主要な社会的要因等を究明した。

第4章では、上記の政策、社会的要因の影響のもとで実施された青島軍政署の三期工事計画、日本新市街の選択、新町三業指定地、住宅地、工業指定地の建設を考察した。具体的には、青島における商業中心地が日本新市街方面へ移転し、台東鎮周辺と四方、滄口地域を中心とした近代工業地域の成立過程を明らかにした。また、神社・忠魂碑・桜といった日本的要素の取り入れを分析することで、既存の西洋的な都市空間に日本的特徴が加えられたことを確認した。さらに、都市開発の担い手である日中の不動産業者、建設業者に着目し、都市建設のブームとともに成長したこれらの会社や個人の軌跡も検討した。ドイツ租借期と比べ、支配者側の国内との社会構造上の同質性、土地開発の装置としての遊廓の建設、多民族の雑居、集中的な工業地域の開発などの相違点が指摘された。

第5章では、まず山東還付後青島の社会構造上の変容を考察し、日本人社会は一時的に縮小したものの、長期にわたって15,000人程度を維持しており、青島における外国人社会のなかでは圧倒的な優位を保っていたのみならず、日中全面戦争勃発までは華北の各都市のなかでも始終一位を占めていたことを明らかにした。また、青島において日本勢力が長年維持できた要因について、還付後に日本が確保していた領事裁判権と土地に関する借地権、所有権によるところが大きかったことを指摘した。さらに、国武農場懸案という具体例を取り上げ、その長期にわたる交渉過程を分析することにより、中国側による土地権益の回収の困難さと複雑さを浮き彫りにし、日本側による滄口市街地借地権が維持できた背景を明らかにした。

第6章では、まず山東還付後、中国がドイツと日本の造った既存の都市空間を継承しながら、局部的に都市開発を行い、回瀾閣、湛山寺といった中国の伝統的な要素を取り入れようとした試みを明らかにした。また、青島の歴史上はじめて中国政府によって作成した大青島都市計画と青島市政府職員の日本都市視察に着目し、西洋と日本の都市建設の経験を学ぼうとする青島市政府側の姿勢を解明した。さらに、中国人作家林微音の足跡を追って、青島モダンの代表的な要素とみられる海水浴、カフェー、ダンスホールなどの繁盛ぶりを取り上げ、1930年代における観光都市・国際都市としての青島の様相の一端を考察した。一方、都市の繁栄を支える影の部分とされる花街と煙館に光をあて、中国、日本、朝鮮、白系ロシア、西洋といった要素が複雑に絡み合っていた情景を考察し、青島の生活空間の隅々までに浸透していた日本的要素を明らかにした。

以上のように、日本的要素なくしては近代青島の都市空間が成立しなかったことは言うまでもない。青島都市史研究から見れば、本論文は先行研究等で看過されてきた日本的要素に着目し、その断絶と連続性を解明したことによって、当時より「東洋のベルリン」と

呼ばれつづけてきた近代都市青島の都市像を修正し、その新たな一面を提示した。また、従来都市計画史だけが重点的に研究されてきたが、本論文は社会構造、統治政策と都市開発が三位一体となって近代青島の都市発展を支えていた過程を考察し、より立体的な青島の都市空間像を描出した。さらに、本論文は一都市のレベルで日本的要素の関与した地域社会の実像を立体的に浮かび上がらせたと同時に、帝国のフロンティアという視点からのアプローチによって、より重層的かつリアルな日本帝国の一面を見出すことができた。

近代青島は、香港のような植民地都市、上海や天津のような租界都市とは異なり、ドイツ帝国と日本帝国の統治経験が受け継がれながら、その後の中国独自の経営によって成長しつづけた。そのため、新たなモダン都市への道を辿った青島は、中国における近代受容の多様性を物語る格好の空間的事例であった。ドイツ帝国にとっては、極東地域の「模範的」植民地と位置づけられたため、青島はその東アジアへの勢力拡大においていわば橋頭堡的な役割を果たした。一方、青島と日本との関係に関しては、第一次世界大戦の青島占領から日中全面戦争勃発までの長い期間において、中国大陸における日本人社会の規模、日本政府や民間の投資額、日本人の享受できる特殊権益などを考慮すれば、青島はまさに帝国日本の中国進出の大きな足場であり、始終その帝国的膨張を支えるフロンティアとして機能しつづけていたと言えよう。

青島の歴史を振り返ってみれば、当時の中国や、ドイツ帝国、また日本帝国にとって、青島は始終一種の「他者」として機能していたとみることができる。言い換えれば、近代青島は、中国における西洋近代受容の窓口でありながら、ドイツや日本の帝国的拡張上の一実験場でもあった。

Form8・Separate Sheet
（様式８・別紙１）

Results of the doctoral thesis screening

博士論文審査結果

Name in Full
氏 名　　単　荷君

Title
論文題目　近代青島の都市空間の変容－日本的要素の連続と断絶を中心に－

本論文は、近代青島が経験した都市空間の変容を都市史・支配政策研究・経済史・社会史など幅広い問題に目配りしながら論じた重厚な研究である。中国近代都市の中で、青島は、ドイツ、日本、中国（中華民国北京政府、南京国民政府）とめまぐるしく統治者が変わったという特徴を持つ。本論文の眼目は、近代青島における都市空間の変容を、先行研究では手薄だった日本的要素の連続という問題に着目しながら、多面的に明らかにしたことにある。

第 1 章では、ドイツ租借期（1898～1914 年）に、ドイツ膠州湾総督府の実施した土地政策と都市計画を検討している。第 2 章では、同時期における日本勢力の進出を検討し、人口構成や職業構成および情報収集活動などを解明している。

第一次世界大戦により日本は青島を占領するが、第 3 章では、この第 1 次占領期（1914～1922 年）、青島の社会構造が大きく変容したことを示した。青島軍政署の土地政策にも支えられ大量の日本人が移住してきたのである。第 4 章では、青島軍政署が進めた都市計画を検討し、新たな日本人街や工業地帯が生まれ、神社や忠魂碑、桜など日本を象徴する要素も取り込まれたことを指摘する。

青島はワシントン会議の結果 1922 年に締結された「山東懸案解決ニ関スル条約」によって中国に返還されたが、第 5 章では、還付後も青島が華北の都市としては最大規模の日本人人口を抱え続け、日本人の土地権益も相当に残っていたことを明らかにしている。第 6 章では、中国側による都市改造に着目し、中国の伝統的要素を盛りこんだ寺院・公園などのランドマークが取りいれられるとともに、日本の都市計画も参照した「大青島」都市構想が策定されたと論じる。

終章では、近代青島における有形無形の日本的要素を改めて確認した上で、その都市空間形成の特徴として、民間勢力が主導的役割を果たしたこと、中国の他の租界都市と比べた場合、強力な第三国の勢力が不在だったことを指摘している。

本論文の意義は、ドイツ占領期以降、約 40 年にわたる時期を対象としながら、青島の近代史の全体像を見事に描き出した点にある。従来、近代青島については、ドイツ占領期、日本占領期、中国還付後の時期を通観する研究が乏しく、また、論じられる文脈も近代日本外交史、中国租借地研究、日本人の海外移民史など様々であった。それらの研究を丁寧に踏まえつつ、都市青島の近代史を初めて通史的かつ体系的にまとめ上げたことに本論文の最大の意義を見いだすことができる。特に近代青島における日本的要素に着目することで、従来「東洋のベルリン」と称されていた青島の都市像を修正し、中国における「近代」受容の多面性を提示することに成功している。個別的なレベルでも、青島軍政署による復辟派と革命派への支援（第 3 章）や、山東還付後における

日中土地権益紛争の典型例としての国武農場問題（第 5 章）など、この論文によって初めて明らかになった歴史的事実は少なくない。日本語・中国語・英語・ドイツ語を駆使し、公文書・統計から新聞雑誌・文学作品・日記などに至る幅広い文献や資料を博捜した本研究が、今後の青島研究における必読文献の地位を占めることは間違いない。

このように本論文は既存研究を大きく超える達成を示しているが、改善が望まれる点がないわけではない。「日本的要素」の連続性については丁寧に説明されているが、逆に統治体制の変化にともなう断絶の側面は自明とされている部分もあり、より明確な議論を提示することが求められよう。また、そのうえで、本稿の明らかにした戦前青島の都市像を、戦後あるいは現在の青島まで視野に入れつつ、さらに長いスパンのなかで位置づけると、よりダイナミックな議論が展開できるだろうと期待される。ただ、これらの課題は、本論文が近代青島の全体像を通時的に明らかにしたことによって初めて見えてきた論点であり、本論文の価値を損なうものではない。

帝国日本のフロンティアでドイツ・中国の影響との相互連関・相互変容を経ながら発展してきた都市・青島の歴史を重層的・体系的に解明した本論文は、国際性・総合性を十分に備えており、国際日本研究専攻の学位を授与するにふさわしいと審査委員全員一致で判定した。